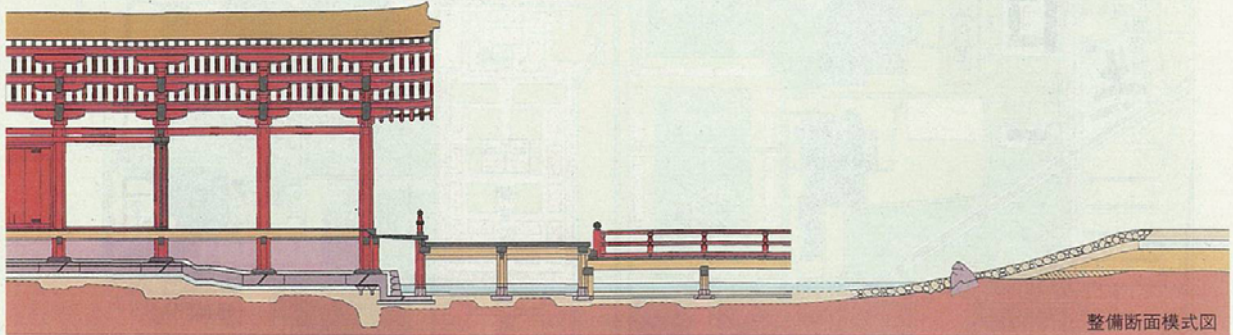


## ●庭園地形の復原整備

庭園地形の整備では地下に残っている遺構をきずつけないように、土盛による保護を原則としておこなっています。遺構の真上に復原建物や築地塀を建設する場合、40cmほど盛土して整備地盤面としました。一方、池の部分では、地形そのものが遺跡であることから、景石や洲浜石敷の遺構そのものを見ていただきたいのですが、洲浜の遺構は大変こわれやすく露出に耐えないため、砂と不織布で覆って保護した上に、遺構と類似した小石（径5～10

cm程度）を厚さ10cm程度に敷きつめ、奈良時代の洲浜を再現しました。盛土の厚さによって生じる地盤高の差については、庭園の各所で滑らかにつないで処理しています。露出している景石の表面は合成樹脂で強化し、割れていたものは接着して修復しました。景石が失われたと考えられる位置には、裏に補充年度を墨書きした石を新たに据えて、奈良時代のものと区別するようにしました。



## ●池の水

池を持つ庭園においては、水の扱いが重要となります。奈良時代後期の東院庭園では庭園北方の西から東へ流れる石組水路とこれを受ける石組護岸の小池が給水施設の中心で、このほか池北東部の湧水部分には曲げ物を据えて水源を確保していました。また、池を乾すために水を抜く際は、南面大垣の下をくぐらせた暗渠を使用しました。整備では、石組水路と小池を復原して池の給水をおこなうとともに、水の淀みをなくすために池の西部を中心に池底の9ヶ所に給水管を増設しています。池の水量は約350㎡、給水には井戸水を使い、「宇奈多理の杜」の北西方に設けた管理施設で最高1日3回の割合で循環浄化し、清浄な水質を保つ工夫をしています。

## ●植栽の復原

植栽は庭園の景観を形づくる重要な要素です。発掘調査によって池の堆積土から採取した植物遺体（枝葉、種子、花粉など）を分析した結果、奈良時代後半の東院庭園には、主にアカマツ、ヒノキ、ウメ、モモ、センダン、アラカシ、ヤナギ、サクラ、ツバキ、ツツジなどの樹木が植えられていたと推定しています。この成果を中心に、『万葉集』や『懐風藻』などにみられる庭園植栽の記録も参考にして、樹種を選びました。植栽の位置は、樹木の植え穴もしくは抜きとり穴の可能性のある浅い窪みや、大きな枝がまともって出土した位置などを参考にして復原しました。また、樹の大きさや形は、平安時代の『年中行事絵巻』などの絵画資料を参照し、全体の景観に配慮して決めました。



図 I-14 パンフレット「平城宮 東院庭園」-2